

経済と環境と宗教

経済学の新しい視点を求めて

八巻節夫

昭和四十九（一九七四）年十一月、第三十七回本部総会において、池田名誉会長は、「消費型文明」から「循環型文明」への転換、すなわち「欲望拡大型」の経済から「欲望調和型」の経済への転換を提唱された。問題はその「循環型」・「欲望調和型」経済システムの具体的全体像とその実現の方法である。従来の「消費型」あるいは「欲望拡大型」経済の特徴は、企業にとっての極大利潤の獲得、消費者にとっての極大満足の達成を目指す「成長至上主義」経済である。

そこでは、パレート最適という美名のもとに、市場価

値ある財・サービス（GNP）の生産と消費の最大化をもたらす。こうした成長至上の経済は、企業に財やサービスをいかに「より多く」かつ「より安く」生産するか、そして消費者にあれもこれも買えと絶えずそのかすことによつて、「より多く」消費することに明け暮れさせる。しかし、このように絶えず走っていないと倒れてしまう不安定な成長経済には限界がきていることは、各方面から指摘されてきている。地球環境破壊からの告発は、その最も根底的な問題提起である。しかし問題なのは、それにもかかわらず、何事もないかのごとく従来のビジネ

ス文明が現実の人間生活をおおいつくしていることである。どこから大きな手は打たれず、このまま人類は日々刻々と死滅の方向につき進んでいくのか。

確かに、現在国連を中心に環境破壊に立ち向かつての共同行動の手が打たれているし、国民の意識も以前よりは高まってきたようである。しかし、それでもとどめがきかない程に、企業も、家計も、政府も「欲望拡大」へつかれたようにひた走っているのである。

こうした成長信仰や欲望拡大をもたらす根底に、現代人の頭の中にはびこっている次のようないくつかの固定観念があるように思われる。

(1) 「物的消費の拡大が人々を豊かにする」

しかし、現実はいまだこの逆であり、物的消費が拡大した割には人々の満足感が増えていない。むしろ、生活のあらゆる所で欲求不満が拡大している。これは単に環境破壊が進んでいるとか、社会資本が不足しているとか、労働時間が長いとか、資産格差が広がっているとかの理由だけによるのではない。人生の喜びや充実は、心理的側面に頼るところが大きい。それは単に、物的消費

ばかりでなく、バランスのとれた人間関係、家庭生活、地域・文化活動、レジャー、宗教活動、他者への奉仕、美的感性、自己成長など、生命の体験的部分によるところが大きい。物的消費そのものが悪と言うのではなく、その間違いじみた拡大が、人生の体験的満足をことごとく破壊してしまうそのシステムの方向性が人を不幸にしていると言いたいのである。

こうして、「成長至上主義」や「欲望拡大」の根本原因は、生命全体の問題を経済学のみで解決しようとしている方向性、つまり、経済原理が生活のあらゆる側面を支配している点にあるものと思われる。

(2) 「人間の欲望は無限だ。それを満たす資源が限られているのであるから、パレート最適を達成しつつ、間断ない経済成長を実現することが人を幸福にするのである」

しかし、まず人間の欲望は無限かもしれないが、その肥大化された充足はむしろ人を不幸にすること、またガルブレイスの指摘を待たずともなく、高度消費社会では、欲望や需要は市場で人工的に創り出されたものが圧

倒的であること、そして、欲望の充足と経済成長との関係はむしろ逆であること、つまり、経済成長システムは、経済の絶えざる拡大を要求するから、それ自身を維持するために無限の欲望を刺激し駆り立てていかなければならないという宿命的悪循環があるのである。

(3) 「個人的欲望の極大化（生産の極大化）が最も理想的な経済状況である」

しかし、この経済原理は次の四つの点でかなり偏狭な考えであることがわかる。まず第一に、今日の「高密度消費社会」では、基本的欲求はほぼ満たされており、その圧倒的部分は人との比較において豊かさが左右される相対的なものである。つまり他の人が同じ物を持っているからこそ持つことに豊かさを感じる性質のものである。このような社会では、逆に誰もが持っているのに自分だけ持っていないという不公平感、これが人生の悲惨を生むのである。従って、誰もが我先にと新しい商品に飛びつく。しかしその結果は目に見えている。新しい商品を買ってもそのために満足することは小さく、ただ取り残されないですむという場合が多い（爪先立ちの論理）。

第二に、成長経済が絶えず満足を上回る必要を生み出す。必要は絶えず陳腐化され、組み替えられていく。欲求の首尾一貫性が失なわれていき、その目的もますますあいまいで確認しにくいものになる。「今日恒常的にしかも大量に出現する新商品群は、欲求の満足を約束する一方で、既存の商品群に関しては不満の感情を助長する。」

欲求と商品の目まぐるしい動きは諸個人に絶えず移り変わる満足と不満のアンサンブルを与える。……言葉を替えて言うと、諸個人は、彼らの満足と不満のアンサンブルを絶えず小規模な商品群から大規模な商品群（あるいは複雑な性質を持った商品群）へと移動させることを余儀なくされる。」（W・リース、「満足の限界」）。第三に合成の誤謬があげられる。個人のレベルでたとえ満足を極大化しても、それを生産する過程で資源の消費、労働力の消耗、環境の破壊という人間の満足にとってマイナスの要素を同時に極大化しているという物的消費の二重性があるため、社会全体の満足は必ずしも増大するとは限らない。以上のように、成長経済は次第に生活の窮乏感を拡大していくのである。

(4) 「生産性の向上は進歩である」

人々が生産性を二倍にしたとすれば、それはそれらの人々の所得を増やすか価格を低下させるであろう。しかし、雇用と成長を維持していくにはそれは同時に二倍の生産の拡大、従ってまた二倍の消費の拡大をしていかなければならないことを意味している。また高い生産性は大変な競争とストレスなしには実現できない。このように生産性競争社会は、絶えず消費を拡大させ、レジャーや文化活動、家庭生活、地域活動、友達との付き合いを犠牲にしていく社会である。これが人生の進歩と言えるのか。

(5) 「ゼロ成長は馬鹿げている。経済成長は必要であり、要は環境といかにバランスを保っていくかだ」

確かにある程度の成長はむしろ必要かもしれない。しかし、この主張は経済成長の利益を過大評価し、環境破壊の害毒を過小評価しているところがある。成長経済は、絶えず走っていないと倒れるように仕組まれていて休むことを許さない社会である。しかも成長から得られる果実は幻想に終わることが多い。経済成長は国民を物質主

義に暴走させる傾向がある。他方、今日の環境汚染は、どれも肉眼では見えない。そしてその作用が長い。オゾン層を破壊するフロンの潜伏期間は九十二年もある。また癌の確率が高まるといっても、それはあくまで必然性ではなく蓋然性の問題に過ぎない。ここにどうしても現実の生々しい物欲に目が向けられ、環境破壊の進行が軽視される原因がある。

(6) 「まず全体のパイの拡大が先決である。経済成長しつづければ社会資本の充実や社会的貧困も解決できない」

しかし、成長経済は、いつも他者との間に差を設けていかなければ満足を得られない宿命的な社会である。全体のパイが大きくなって、少しは人並と思つた頃には高所得者にさらに、いろいろな形で水をあけられ、いつまでも追いつくことができない。人の満足はこの相対的大きさによって決定的に左右されるのであって、パイの量の拡大が絶対的条件ではない。

P・L・ワクテルが指摘しているように、豊かな社会をゆるがしている根本的欠陥とは、皮肉なことに我々に

経済的成功をもたらした思考様式（物的欲望の絶えざる拡大が人々を豊かにするといった思い込み）そのものである。

成長経済には、欲望と羨望と不満が不可欠である。そして経済が欲望を原動力にしている限り、我々は満足して休むことができないのである。我々の経済は安定状態の経済ではなく、拡大し続けなければ縮小する経済である。我々は夢想だにしなかったような豊かさを手にいれながらその豊かさを楽しむことができない。現代人は悪循環に陥っている。真に豊かさをもたらすもの（共同体、美的感性、温もり、ゆとりなど）を犠牲にして、無意味なものしか手にいれていない。

これまではどんな犠牲を払っても生産を極大化し、欲望の最大満足を得ることを生活の組織原理にしてきた。しかし、犠牲は大きくなるばかりであり、我々は、欲求不満と生命力の衰退と生きる空しさと凶悪犯罪と環境破壊、生命軽視の海の中であえいでいるのである。いま必要なのは、「もっと多く」と唱えることではなく、「盲目的な成長信仰」から目覚めることである（P・L・ワクテル『豊かさ』の貧困）。

しかし、問題なのは、こうした「成長システム」から豊かさを楽しむ「生活システム」へいかにして転換できるかである。欲望拡大のくびきから人々を解放し、真に人生を楽しむ原動力を与えるのはその人のもつ生命力である。魔性的欲望をコントロールしていくには強靱な生命力が必要であり、物の価値の大小も生命力の強弱が左右する部分が大きい。循環型経済のイメージは、こうした生命力が絶えず再生され、復元される生活システムである。循環とは生命力が循環されることである。こうした生命力を支える要因は多様である。単に財・サービスのみではなく環境、生活基盤施設、住環境、余暇、レジャー、趣味、旅行、スポーツ、音楽鑑賞、美的鑑賞、宗教活動、家庭、職場、地域共同体、人間関係、奉仕活動等のインフォーマルな経済、睡眠、休養等々生活のあらゆる面にわたっており、物的消費よりも生命的な体験に負う部分が大きい。

循環型経済システムの目指すものは、生命力の復元再生であり、そうすることによって、生活が物的消費に蹂躪されることを回避し、生命的体験を生活の場に正しく

位置づけるのである。欲望を暴走させる過剰消費と環境への過剰負荷は、生命力を消耗させ、生命力の循環パイプを詰まらせるのである。

こうした循環型生活システムをいかに実現するかは、最大の問題であり、それは歴史上人類のまったく新しい問題である。しかし仏法哲学はその解決の方向性を示唆している。環境と人間活動の一体不二を説く「依正不二論」を初めとして、例えば我慢や抑制といった禁欲的な解決ではなく、「煩惱即菩提」的解決が最善であるとか、あるいは、物的欲望から心への転換を言うあまり、自己革新とか自己実現の道にのみ救いを求める方法には利己的限界があるという「自行化他論」、心の状態とその肉体との密接な関連を説く「色心不二」とか、一つの商品の生産や消費が社会全体としていかなる影響をもたらしかに配慮すべきことを教える「縁起論」（相互主義）など人類のたどるべき大道を示してくれている。また時代の新しい流れも次第にその方向性に気づきつつある。例えば、環境破壊からの告発、物の豊かさから心の豊かさへ、柔らかな個人主義、多価値化社会、新デタラントによる革

縮、生活者重視の政治、生活関連社会資本の拡充等の叫びである。

政府がそのように仕向けていくことも大切であろう。しかし、我々自身が価値観を変えることによって、使い捨てをやめ、再生再利用に協力し、生産↓消費で循環が終結するのではなく、資源消耗や廃棄までも考慮にいれ、「会社人間」として自らの生活を犠牲にすることなく、人生そのものを楽しむというようにライフ・スタイルを変えることが解決への第一歩である。そして、環境破壊を促進するような企業は倒産し、生活者への影響を配慮しない商品は排斥淘汰されていくようなシステムが市場を通して達成されていくことが肝要である。今こそ、極大原理から必要原理へ、生活の量から質へ、利己主義から相互・利他主義へ、GNPから生命力復元指標への転換が声高に叫ばれる時である。

（やまき せつお・東洋大学教授）